

2024年10月19日(土)

東京教区渋谷聖ミカエル教会 2024年度「ヒルダ・ミッシェル信徒講座」

聖公会神学院「信徒の召命・奉仕職コース」「特任聖職特別コース」

司祭アンデレ 中村 邦介

はじめに

竹田 眞校長(当時)との出会い～70年代「神学院教育改革」後の神学教育

1) 神の宣教(Missio Dei)に参与する「神の民(教会)」

神はすでにこの世界において救いの御業を行われておられる、神の民の共同体(教会)は神ご自身において営まれているこの宣教の業への参与のしるしであり、そこに使命と存在事由がある。これまでの教会観の転換、教会は神の宣教の機能、器であることが強調される。これは教会を軽視するのではなく、神の宣教によって派遣される使徒的教会としてある。しかしキリストを頭とする教会は、単に教会自身の拡張ではなく(世界をキリスト教化する)、この世における神の国(主権・治め)を歴史化(世界の被造性に仕える僕としての役割)するために働く。

2) 「多様な奉仕職」

神の宣教に遣わされる神の民は、世界に仕えるために多様な「奉仕職」を展開する。

当時の竹田眞校長は「宣教学」「現代のミニストリー」を主に担当:特に「使徒継承の問題(特に主教制や三聖職位)」初期キリスト教のカリスマ的職務から初期化カトリシズムを経て伝統的な位階的職制の時代を通して、改めて今日の職制(全体的奉仕職)の移行していく経緯を教えた。またそこではOrder(序列)とFunction(職務)、組織(管理から共同体)と権威(聖俗二元論)の刷新としての「奉仕職」の強調

教会における制度と出来事の相補性(アブラハム・モチーフとモーセ・モチーフ)

○聖職と信徒の協働(Inter-Vocational Ministry)、信徒の奉仕職(Lay Ministry)による多様な働きの構想:現行法規第6章第63条「信徒奉事者:礼拝において牧師に協力する」からの展開の可能性

3) 社会的霊性、共同体的霊性の強調:この世への奉仕と解放に仕える霊性

ケネス・リーチ『牧者の務めとスピリチュアリテイ』:内面的平安と葛藤の停止は誤った鎮痛的な霊性であり、むしろ問いかけと洞察の霊性～闘いのための励ましに向かう

(1) 「神の宣教」の背景

いわゆる「世俗化～神の棚上げ現象」により、社会文化的な状況の変化、宗教の周辺化、聖俗二元論やキリスト教信仰の私事化が進展し、これまでのキリスト教や教会と社会との関係が大きく問われてきた。

20世紀は教会論の再検討という課題 教会は単に教会内に向かって方向づけられるのではなく、外に向かって世界との関係において方向づける必要。

伝統的に教会の本質:「正しく教えられた福音と正しく執行されたサクラメント」が「聖なる信仰者の集まり」となる。しかしこの定義には欠損(祭儀共同体)があると再認識 一体「何のためにあるか」:教会自身のために存在するのではない。「世に仕える教会」としてのアイデンティティを回復する。

既にこの神の宣教というテーマは戦前から教会を越えてこの世における神の使命と

いう課題の中で、世界における教会という教会の自明性への問いとしてあった。

しかし戦後、特に1948年 WCC(世界キリスト教協議会)アムステルダム、1954年エバンストンなど、1958年 H.クレマー『信徒の神学』

○カトリック教会は1930年以来「アクション・カトリック」世界における「教会の使徒的機能」の遂行、1953年イヴェス・コンガール『教会における信徒』信徒の教会における副次的立場を指摘、これらの影響を経て決定的には第2バチカン公会議「聖性への普遍的召し出し」として「信徒の祭司職」、そして聖なる伝統としての「位階的聖職観」の克服～教会の権力は支配ではなく奉仕である。

○1958年及び1968年聖公会「ランベス会議」；信仰における教会の革新、職務の革新が大きなテーマとなった。

○1968年 WCC ウプサラ会議「他者のための教会」God-church—world は God-world-church に転換すべき～教会は人類とこの世の奉仕へと召し出されている。

○1984年「宣教課題と方策に関する諮問グループ」(MIASAG)「宣教に適切な場を与える」に基づいて1988年ランベス会議:Transformation 変容がテーマ、「福音伝道の10年」の提唱、慣習的な教会からの変容:「例外はあるが、アングリカン・コミュニオン内の教会の支配的モデルは、牧会的なそれであり。教会生活の各側面の強調は宣言と奉仕というよりは、むしろ牧会と養育におかれる傾向」

いわゆる福音伝道10年の提唱は、従来の教会を再強化するというより、現在の教会の在り方を再検討する課題の中にある。これまでの教会に宣教を付加する方向ではない。

(2)「多様な奉仕職」

1970年以降、ランベス会議や第2バチカン公会議を受けて「全体的教会論」「全体的奉仕職」聖職と信徒の相互関係による奉仕職、聖職を補助する信徒という慣習的理解から神の民の奉仕職(たとえば聖職が信徒をだけではなく、信徒が聖職を育てる)聖職中心主義からの脱却、また聖職の役割と宣教を同一視せず信徒の自発性と責任、洗礼による信徒の奉仕職という理解

神の宣教というテーマにおいて、とくに「信徒」の働きが極めて重要であると、労働司祭、女性聖職などと共に認識されてきた。特に教会と社会との関係を考慮するときに、教会制度を超えた信徒の役割は不可欠な存在

教会の祭司職(Common Priesthoodと Ministerial Priesthood):区別するが分離せず、教会全体に託された職務、洗礼の神学:洗礼による責任を自覚した信徒の奉仕職、そこでは聖職制度(叙任)と信徒の立場との問題～米国聖公会「もつれた糸(結び目を引っ張れば、結び目が固くなり、それを解く必要)」と表現、これまでの牧師中心の教会制度(管理機構)、職務と雇用との区別、この世における奉仕と教会における奉仕の二つの焦点の楕円構造

欧米では60～70年代以降積極的に Lay Reader, Lay Eucharistic minister, Lay Preacher, Lay Pastorate と呼称

(3)英国での経験

1990年代 Mission Centered Church への精力的な取り組み、パリッシュ・チャ

一チの再検討、「教会は何よりもそのメンバー以外のためにも存在する唯一の組織である(W.テンプル)」これまでのメンバーシップ・メンタリティ、消費者クライアント志向ではなく、この世を旅する弟子としての共同体を目指す。

○R, Warren, *Building Missionary Congregation, Being human, Being church* [宣教的な神の民(共同体)]の形成、教会の維持からミッションへ

宣教を優先的課題とする信仰共同体の形成、教会の本質を再形成(宣教を疎かにして牧会を中心にする傾向にある)、信徒の活力を失わせる階層的制度、福音の預言者的ダイナミズムの再発見、洗礼によるアイデンティティの見直し、教会生活の共同体的性格の更新、教会生活から日常生活全体に、活動の質ではなく生活の質を変えることにフォーカスを移行する。

「宣教的教会」の構築

Church=building+priest+stipend から

Church =community +faith+action



○John Hopkins ;Church Planting

イングランド教会全体の運動として1990年代に開始、各教会の信徒チームが毎月集合して、各教会の報告を順次ケーススタディとして検討する。またその成果を報告して更に検討し合う。教会の弱点と利点を評価し合う話し合い。

私の経験はヨークシャーのある教会で毎月1回、全部で約20教会が参加

○ST, John Church (ダラム近郊 ゲイツヘッド) フランク&アリソンホワイト司祭(のちに主教) 英国の最優先地域の一つゲイツヘッドにおける働き、とくに青少年へのケア、地域センターまた信徒の結婚準備など、Deaneary(パリッシュのグループ)

の働き、そこでの重要な信徒の役割、チーム・ミニストリーやエリア・ミニストリーの可能性

(4) 聖公会神学院の「信徒の召命・奉仕職」「特任聖職特別コース」
 神の民(教会)の奉仕職のプラットフォームを拡大して、信徒と聖職との協働に基づく「宣教的教会(神の世界のための神の教会)」を目指す
 日本聖公会の現状～信徒の減少と高齢化、聖職の激減、財政の逼迫、次世代の青少年の僅少、礼拝や教会内の活動が内向きに終始して、新来者の皆無、教勢の低下などが顕著となり、大きな曲がり角となる。これまでの教会を維持し継続するだけではなく、既成の教会論の再検討を踏まえて、転換と変革に取り組む機会である。

2020年「信徒の召命・奉仕職コース」開始、コロナ・パンデミックの影響で23年からはオンラインによる「信徒の召命・奉仕職コース」と新たに「特任聖職特別コース」
 単に教役者不足の補充ではない、「神の民としての共同体」形成への取り組み
 23年ランベス会議「神の世界のための神の教会」イエスに従う、弟子としての召命

別紙参照

最後に～2023年のデータブック
 キリスト教や聖書に関心をもっているが、教会という組織や制度に関わることを望まない、ただキリスト教に好意的な印象を持っている。
 いわゆる「ミッションスクール」の卒業者が人口に占める割合が非常に多い。キリスト者は人口の0.8%未満の現状
 パラチャーチの領域；教会の周辺、地理的ではなく、関心や親近性

信徒は神の恵みの歴史化に生きる(終末論的存在、将来としての神に向かって)
 課題は宣教における教会論と奉仕職の新しい方向付けと変革に抵抗する教会の頑迷(かたくなさ)にある。「絶えず改革する教会(Ecclesia semper reformanda)」
 教会はただ現状維持によるサバイバルではやがて消滅に向かう。
 メタノイアを媒介にして将来に向かう方向性
 特に教会の権威(『ヴァージニア・レポート～聖公会の信仰と組織』)教会の権威はコイノニアの原理、団体性や同僚性の構築、下位支援の原則など